

第 59 回 防災カフェ (Web) を開催しました。



防災意識の向上へ向けて

～「実践的防災」から「お手軽防災」まで～

日時：2021年6月11日（金）18時30分～20時30分

ゲスト：豊田 祐輔 さん

（立命館大学 政策科学部 政策科学科 准教授）

ファシリテーター：里深 好文 さん さん

（立命館大学 理工学部 環境都市工学科 教授）

災害大国である日本ですが、地域の防災訓練を実施しても、住民の防災意識が低く、特に若い世代の参加が少ないことが問題とされています。地域でどのような取り組みを進めていけばよいのでしょうか。これまでの事例やコロナ対策も参考に、一緒に考えました。

2014年の防災意識調査では防災意識の高い割合は60歳代では60%以上に対して、20歳代は30%程度で、若年層ほど防災用品を準備していない割合も高く、20歳代の男性の4割は防災のための備蓄は0になっています。

1959年の伊勢湾台風による大きな被害が契機となり、ハード中心の防災対策が進み、その後大きな自然災害も少なかったため、国民の防災意識は希薄化していきました。しかし、1995年の阪神・淡路大震災の経験

を踏まえて自助と共助が大切であると再度認識されるようになりました。地震直後から救助活動に取り組んだ近隣住民により救出された約27,000人の方の生存率は80%超でしたし、淡路島北淡町では、消防団員が高齢者の寝ている部屋を知っていたので、倒壊家屋から被災者を救い出すなど、目覚しい救出活動を展開しました。しかし、現在の防災意識や住民間のつながりには大きな課題があります。



ゲスト：豊田 祐輔 さん

地域防災はピラミッドのような3段階のアプローチに分けることができます。一番上は、日常から防災訓練等に参加している層を対象とした災害を具体的にイメージする防災です。真ん中は防災にはあまり関心はないが、地域活動には比較的参加して

(2)地域防災3つのアプローチ

- ①災害を具体的にイメージして防災力を高める
- ②地域活動参加へのハードルを下げる
お手軽防災
- ③不参加者への最低限の情報提供を



いる層を対象とした参加へのハードルを下げたお手軽防災です。一番下は何事にも参加しようとする層を対象とした最低限の情報提供という防災です。本格的な防災の例として、地域の現状把握と課題の共有を図りながら、何をすべきかを話し合うための地域防災マップづくりなどがあります。

②例：炊き出し試食会（防災イベント）



- ・地域イベントに加える
より多くの参加者や見学者
- ・参加を促進
子どもや親へのアプローチ
防災意識の高まりと住民関係の醸成



22

お手軽防災の例として、炊き出し試食会を実施したことがあります。平日の日中に地震が発生したと想定し、地元の商店街の人たち、大学生、子供とその保護者で何ができるかを考えるイベントとして炊き出しや商店が提供できるもの、大学生による防災ゲームなど子供たちを対象にして実施しました。保護者も子供と一緒に参加していました。防災会の方

が積極的に保護者に話しかけるきっかけとなりえます。地域イベントに防災の要素を加えるなど工夫をすれば、住民の防災意識を高めるとともに人間関係の醸成にもつながります。

2017年全国の18歳から49歳までの壮年層を対象にインターネット調査で、地域防災訓練への参加頻度を調べましたが、約6割がまったく参加していないことがわかりました。どのような形態の防災企画なら参加しても良いかを尋ねると、防災企画の中で最も高い割合となったのは防災イベントでした。また男性は本格的な訓練よりもイベント形式の取り組みなら参加したいという割合が高く、小学生以下の子どもをもつ方は、防災訓練とイベントや運動会を組み合わせた取り組みを評価する傾向がみられました。ただ楽しむイベントで終わらずに、防災について考えるきっかけづくりと近隣住民のつながりがつくれる企画になるような工夫が求められます。まったく参加しようしない人たちには、ごみの日のカレンダーなどの必要な情報の書いているところに避難所情報を書いておくなどの工夫を進めることで、非常時に必要な情報提供ができます。

コロナ禍で防災訓練やイベントを実施するためには3つのポイントがあります。まず、①防災訓練の参加者を減らすこと。②新型コロナウイルス対策を徹底すること。③オンラインを活用することです。それに加えて単発のイベントで終わらせない仕組みづくりも重要です。あるマンションでは、在宅避難を想定しオンラインを活用して安否確認されました。訓練時に玄関ドアに張られた安否確認カードを、管理組合の方が確認しましたが、不在の場合はWebアプリを利用して外出先からも安否登録できる方法を用いたこともあり、9割近い参加率になったそうです。

(3) コロナ禍をチャンスに！

30

- ・ **オンラインを活用**する
自宅に参加し、いつでも振り返ることができる
→ 訓練映像の配信など
- ・ 参加者数を減らす (=ある時点で会場にいる**参加者数を減らす**)
会場で簡単に実施し(イベント)、家でも振り返ることができる
→ 取り組み映像の配信、オンラインでの応用防災の動画紹介など
- ・ **やる気を維持**させる
ゲーミフィケーション(ゲームの考え方を生活に)を活用する
→ 継続的に取り組んだ方(実施カードなど)への防災グッズ提供など

また「おうち探検」と名付けて非常食などの備蓄品を子供たちが探すなどコロナ禍でも開催できるオンライン防災イベントも行われました。避難訓練の様子をライブ配信することで、自宅に居ながら防災について考えることができる企画もあります。実施する場合も複数回に分ければ、ある時点で会場にいる参加者数を減らすことができます。会場での訓練は基本部分のみとし、さらに積み上げるための取り組みは映像で配信し、自宅で振り返ることができるような工夫も考えられます。防災に興味がない方でもやる気を維持できるように、ゲーム感覚を取り入れたゲーミフィケーションという考え方もあります。正解はありませんし、何をすることも地域によって異なります。工夫するにはオンラインの活用はとても有効な手法です。方法が多様化すれば参加者も多様化します。このような視点を生かしてこれからの防災活動を考えていきましょう。



ファシリテーター：里深 好文 さん

参加者の皆さんから、多くの質問をいただきました。いくつか紹介します。

問：コロナ禍で集会ができない状況で、SNSを頼りにできない場合について教えてください。

答：三密を避けて実施することが重要です。災害時にSNSが利用できないこともあるかもしれません。インターネットを使えない人にはどう対応しようと考えすることは、使えなくなった状況の中でどうすべきかを考えることにもつながります。人のつながりが脆弱になっていることも大きな課題です。住民が緩くつながることができるためのきっかけづくりが必要となっています。

問：防災イベントを考えていますが、新型コロナウイルスの感染リスクのため、準備の会議も心配される方もあり、どうすればよいか困っています。

答：対面はできるだけ減らさないといけないと思いますが、自宅の備蓄品や食料、水などを調べるなど、オンラインの利用や集まらなくてもできることを考えてみてはどうでしょうか。

問：大学で防災に関する講義はありますが、講義を通じた知識の教授だけでなく、学生同士で防災施策やとるべき行動について考える機会も必要だと思うのですが。

答：防災は困らないように事前に何かをするということですから、練習や演習でいかに困れるかが大切です。想定を超えたときに、臨機応援に行動することが必要になります。精一杯やっただけで、うまくいかなかったという経験をしていくことが大切です。

まとめとして、「災害時には失敗しても良いのでとにかくやってみようとするのが重要です。プライベートをどう守るかということと、防災力を上げることは相反しています。失敗を積み重ねて、できない自分を知ることが一番の強みになります。失敗しないために何もしないというのが一番良くないと思います。」というお話がありました。

豊田さん、里深さん、参加者のみなさん ありがとうございました。